
脂身と異世界にいるんだけど質問ある？

てのひら日記

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脂身と異世界にいるんだけど質問ある？

【Nコード】

N2456X

【作者名】

てのひら日記

【あらすじ】

一般学生と脂身（変態）が不思議な鏡を見つけ異世界に飛ばされる話です。

変態×ギャグ×チート！？？

この小説は脂身成分を多く含みます、アレルギーなどに注意してください

異世界学園ものです まさに脂身小説です
初投稿です 小説書くもの初めてです
お手柔らかにお願いします

主要登場人物：能力説明 わからなくなったら読んでね 随時更新

主人公：市原 隼人

容姿：そこそこ良い

身長：171cm

ステータス

種族：人間

潜在能力

体力：C-

筋力：D

知力：B

魔力：S

精神力：SS

敏捷度：C

器用度：A

ギフト説明

ギフト1：魔力増加（大）

効果　　：「魔力が大幅に上昇」

発動条件：常時発動

ギフト2：異空間収納

効果　　：「異空間に物を収納」（生物は収納できない）

発動条件：対象物を触れる、念じる（自分が持てる重量の物しか収納できない）

ギフト3：武器重量感無効

効果　　：「武器の重量感が無くなる」（重量は変わらないので威力はそのまま）

発動条件：武器に触れる

		主人公との関係：中学の入学式からの友人（脂身）
ステータス		
種族	：人間（脂身）	
潜在能力		
体力	：B	
筋力	：C＋	
知力	：F－	
魔力	：D＋	
精神力	：C	
敏捷度	：B	
器用度	：D	

副主人公：小椋 浩太（脂身）

容姿 ：そこそこ良い（脂身）

身長 ：178cm（脂身）

ギフト説明

ギフト1：超回復

効果　：「体の異常を高速で治す」

発動条件：ダメージを受ける

ギフト2：魔力感知

効果　：「魔力を感知する」

発動条件：常時発動

ギフト3：状態異常無効

効果　：「状態異常にかからなくなる」

発動条件：常時発動

主人公の友人：ダリル「コータ

容姿	：？？
身長	：200cm
主人公との関係：主人公が異世界に来た日に出会い友人になった	
ステータス	
種族	：獣人（狼）
潜在能力	
体力	：A
筋力	：S+
知力	：D
魔力	：F
精神力	：C
敏捷度	：A+
器用度	：C
ギフト説明	
ギフト1：筋力増加（大）	

効果　：「筋力が大幅に上昇」

発動条件：常時発動

一話目 俺と脂身と

脂身と異世界にいるんだけど質問ある？

俺（市原 隼人）には中学のころからの付き合いの脂身（小椋 浩太）がいる、なぜ脂身と呼んだかという、昔友達同士で焼き肉を食べに行った時、肉に例えるなら誰が何という話になり俺が

隼人 「お前は脂身だろう？」

小椋 「脂身！？何それどういうこと！？」

友 「あーわかる、脂身の部分ってはじめ食つてると美味しいんだけど後から吐きそうになるんだよな」

隼人 「そうそう、はじめ話てみると面白いんだけどさ、テンション高いまま話続けるからウザクなってくるんだよねコイツ」

小椋 「あ、それ母ちゃんにも似たようなこといわれた」

友 「母親に言われるってどんだけだよ、つか家でもテンション高いのかよ！」

小椋 「いやー生まれながらのスッパスターの俺は誰にも止められないZE」

こういう奴である、背が高く（178cm 俺は171cm）、容姿そこそこ良く、エロイ、そのため学校内では男女共に人気があるのだがなぜか俺に懐いてきて中学一年の入学式にちよつと話しか

けられてから、一ヶ月ほどで市原&小椋みたいな認識になっている、一度俺のどこを気にいったのか聞いてみたところ

小椋 「俺、お前がいるとすっげー落ち着いてテンションあがれるんだ！」

隼人 「気持ち悪っ（落ち着いてテンション上げる・・・？）意味がわからねえ・・・」

こんな感じで中学1年から高校1年の夏休み、現在までの付き合いである

小椋 「いつちはーらーくーん、あーそびーましょー」

ガチャ！ カラカラカラ （窓を開ける音）

隼人 「お前・・・毎回それで呼ぶのやめろや！携帯なりなんなりあんだろが！せめてインターホン使え！」

小椋 「いやぁん、私ったら、お・ちゃ・め・さ・ん」

隼人 「はぁ・・・まあいいわ・・・お前どうせ次も鳴らさないだろうしなヴァカが！」

小椋 「いーじゃん、別にむしろ3年間続けたのにいまさら変えたくないもん」

隼人 「何、今度は何に影響されたんだよ、言葉遣いがキモイぞ」

小椋 「なんかクラスの女子にお前が喜ぶってメールで言われて試してみた」

隼人 「ま・た・か！お前・女が好きなのになんで俺たちのホモ疑惑に自分から乗っちゃってんの！？」

小椋 「俺・・・お前ならイケそうな気がする」

隼人 「・・・・・・・・」

カラカラカラ ガチャ！ （窓を閉める音）

小椋 「ちよっ、いつもの冗談じゃん！マジ今日暑いんだって！俺んちクーラ壊れて避難しにきたんだYO！」

窓 「・・・・・・・・」

小椋 「・・・ああん！ハヤトオー！俺を捨てないでくれえー！俺お前がいないと輝けないんだ！好きなんだよおおー！」

隼人 「オルアー！（蹴り）」

小椋 「グッハ！？いつのまに後ろに！？」

隼人 「いつのまにじゃねえよ、普通に玄関からだよ」

小椋 「腰に蹴りなんてひどいじゃないか、腰は男の魂ですよ？猛るソウルが突き動かす動力部分なんだZO」

隼人 「はいはい、一回も使ったことねえ動力部分なんていらね

えだろ」

小椋 「いえ！試運転で使ってます！」

隼人 「マジうぜえ・・・いいから早く入ってくれ、近所迷惑する」

小椋 「いつものことだから大丈夫じゃね？あ、さっきその隣のオバちゃんがヨモギ餅くれたから食べようぜ！」

隼人 「は？なんでお前が俺ん家の隣のオバちゃんにヨモギ餅もらってた？」

小椋 「なんか、いつも元気でいいねえ、これどうぞ、って言うてくれた」

隼人 「もう完全に定着してんじゃねえか・・・もういいから入れ、なんか怖いわ」

from：隼人の部屋 時間 11：40分

小椋 「相変わらず綺麗にしてんなー・・・なんかこう・・・プロレスやりたくなるよな！綺麗な和室って！」

隼人 「一人バックドロップやってろ」

小椋 「え、バックドロップって一人でできる技じゃなくね・
？頭打つんですけど」

隼人 「あー昼飯どうする食べに行く？」

小椋 「お金ないから家からカップラーメン2個もってきたぞう
作ってー（あれ？流すの？）」

隼人 「お、サンキュー何もってきたん？見せてみ」

小椋 「はい」

隼人 「ふっざけんな！なんで生麺タイプのめんどくせーやつな
んだよ！」

小椋 「生麺タイプって買ったはいいけど自分で作る気起こらな

くて残るよね」

隼人 「わざとかよ！ツチ・・・しゃあねえから作ってくるわ」

f r o m : 隼人の部屋 12時00分

隼人 「作ってきたぞー・・・って何ゲームしながら俺の菓子勝手に食ってんだ！」

小椋 「え？だって遅いんだもん隼人の部屋はお菓子常備してるからいいわぁー」

隼人 「遅いだもんじゃねえよ、お前が生麺タイプなんて持つてくるからだろうが！」

小椋 「まあまあ、麺のびちゃうし早く食べて、モン。ターハントーしようぜ」

隼人 「こぼすなよ？ 畳はふき取るのめんどいんだからな」

小椋 「・・・フリ？」

隼人 「このポータブルぶっ壊すぞ」

小椋 「じよ、冗談じゃん（目がマジだった）」

二話目 紫色の鏡

f r o m : 隼人の部屋 時間17:00分

小 椋 「あ！すまん2死した、あとヨロピコ」

隼 人 「お前それ何回目だよ！土下座してろ」

今日もいつものように俺の部屋でダベってゲームする夏休みの一般風景そこへ

小 椋 「そういえばさあ、近々なんでもかんでも鑑○団が来るのしつてる？」

隼 人 「ん？ああ知ってる、学校の近くのホールでやるらしいな、それで？」

小 椋 「俺の家にボロい蔵あるじゃん？そこによさげなのあったら出ようかなとおもって」

隼 人 「お前ん家の蔵は確かに古いから良いのあるかもしれんな、でもお前近づくと爺がうるさいって言ってなかったか？」

小 椋 「見つからなければ、どうということはない！」

隼 人 「あーはいはい、それ以前にあれ、鍵かかってなかったか？前に見たときゴツいの付いてたぞ」

小 椋 「あの蔵って側面に窓があるんだよあそこからはしこで入る」

隼人 「そういえばあったなあ・・・はしごで入るのは良いけど、ちゃんと戻れるのか？」

小椋 「二人で蔵の物を台にして肩車すればいけるんじゃない？ダメなら考えるってことで」

隼人 「・・・ちよつとまで、肩車って2人いないとできないよな？」

小椋 「MeとYouがいるじゃないかYO」

隼人 「馬鹿か、俺が行くわけ無えだろ」

小椋 「手伝ってYO！ テレビに出たいんだYO！」

隼人 「そっちが本命か・・・普通に爺に頼めば良いんじゃないかねえのか？」

小椋 「俺が爺に言っただけ許してくれるわけないだろう！？飾ってある木でさえ近づけさせてもらえないんだぞ！？」

隼人 「お前が爺の大切にしている盆栽を手入れと称して丸坊主にしてからだっけか？」

小椋 「というわけで手伝ってください晚饭に焼肉奢るので」
or 2

ふむ・・・確かにあの蔵には興味あるな、爺の趣味的に鎧とかありそうだ見てみたい

隼人 「何時いくんだ？」

小椋 「今日、焼肉食ってから行こうぜ」

隼人 「まじで唐突だな・・・」

小椋 「家族全員が温泉旅行にいつてる今しかないんだよーんで隼人ん家に隠させて♪」

隼人 「お前・・・家族全員が温泉旅行に行ってるのに何でお前はここにいる？」

小椋 「俺がいたら・・・癒されないから・・・だって・・・」

隼人 「焼肉・・・食いにいくか・・・お前の奢りだけど」

小椋 「うん・・・」

脂身・・・マジで家族にもウザがられてるのかよ・・・

from:焼肉の帰り道

小椋 「つう・・・食いすぎた・・・ヤバイヨヤバイヨマジヤバイ」

隼人 「お前なんでラストオーダーでいつも注文しまくるんだよ、そつなるの当たり前だろ？」

小椋 「だってで頼まないと損な気分になるんだもの！つく・・・タッパーさえ標準装備していたならっ！」

隼人 「普通にマナー違反だからな、それ、んで？どつする今日はやめとくか？」

小椋 「なにお？」

こいつ・・・

隼人 「ボディーがから空きだぜっ！」

ドスッ

小椋 「！？ おええええry」

隼人 「蔵の話はどうなったんだよ」

小椋 「おぶっおふっ！、ああ、うん、なんか楽になったから行こう！」

隼人 「吐いたからじゃね？」

form：爺の蔵：外

小椋 「夏だからこの時間でもわりと明るいなライトいらなかったかも」

隼人 「蔵の中は暗いだろ、はしごは？」

小椋 「ここにあるから先にいくわー」

隼人「おーう、いつてこーい」

小椋「いや、来てよ！？なんか中割と怖いんだよ！」

俺呼んだの怖いからだな・・・こいつ

f r o m : 爺の蔵：内

隼人「うえーホコリがひでえなあ・・・」

小椋「まあ爺しか入らねえし掃除もしてないんじゃない？」

隼人「ああ、んでな、お前に残念なお知らせがある」

小椋「お前がそう言った時はすげー嫌なことだよな・・・大体・・・優しく言ってね」

隼人「ホコリで俺たちの足跡が付いてるんだよ、これバレるんじゃない？」

小椋「Oh!! NOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!?!」

隼人「ま、俺は怒られねえから良いや、さっさと探そうぜ」

小椋「そ、そうだな！過ぎてしまったことは忘れよう！どうせTVにでたらバレるんだし・・・高値が付けば全部チャラだ！」

隼人「その前にバレたらOUTだけだな」

なんか、想像してたのより良さげなの無いな、鎧とか刀とか期待したんだが・・・

小椋「お、これなんだ？」

隼人「ん？鏡か？中途半端な大きさだなこの鏡」

小椋が見つけたのはサッカーボールほどの円形の鏡だ

小椋「紫色の鏡なんて激レアじゃないか？よっし！これもってくずえー！」

お、マジだ、紫色の鏡なんて初めて見るな

隼人「おい、こけるなよ？鏡だから割れるぞ」

・・・ん？

隼人「小椋・・・？鏡を床に置いてどこいったんだよ・・・あぶねえな」

どうせ驚かそうとしてるんだろうが俺基本そういうのには鈍いから

大丈夫だな脅かすのが脂身だし

隼人「それにしてもこの鏡綺麗だなしかし紫の鏡なんて見難いだろっになんで作られたんだ？」

・・・なんか・・・眠いな・・・

三話目 平原と非日常

f r o m : 神 殿 ? : 内

硬い・・・体の節々が痛い・・・

小 椋「おいっ隼人！隼人！O K I R O !」

隼人「んあ・・・？うわっ！」

バシン

小 椋「アブアツ！？いたっ！痛い！なんで平手！？」

隼人「顔が近いんだよ！起こすなら5 mは離れろや！」

小 椋「5 m・・・5 mって近いようで遠いよ・・・」

隼人「あー目覚め最悪だ・・・体痛えし・・・」

小 椋「あ、隼人！そんなのどうでもいいから！ここどこか教えてくれ！」

ついに頭逝ったか・・・？

隼人「はあ？俺の部屋・・・じゃないな・・・なんだここ」

確か焼肉食った後で爺の蔵にいつて、それから鏡をみつけたら・・・
ここから記憶が無いな・・・

隼人「蔵・・・じゃないみたいだな地面石だし、つか周りも石作りじゃねえか」

小椋「とりあえず外に出てみないか？あそこから出れるみたいだし」

小椋が指さしたのは木の扉だ

隼人「誘拐・・・？いや、無いな、それなら小椋がいるわけねえし」

小椋「なんで！？なんで俺が居たら誘拐じゃないの！？」

隼人「誘拐対象にお前を入れるなんてありえん、脂身だし、お前の家族、絶対身代金なんてお前のために出さないだろ？」

小椋「・・・ああ・・・なるほど・・・っう！心がっ！痛いっ！」

隼人「痛いのは頭だろう・・・ほら、さっさと立てとりあえず外に出るぞ」

from：神殿？：外

隼人「なんだこれ・・・」

木の扉越えて石の階段を上りきった後見えたのは

隼人「平原・・・？」

ありえない、何がありえないかというと広すぎる、4方向すべて見えなくなるくらいまで平原だこんな場所は日本でありえるのか？

小椋「おおーひつれえー！テンションあがってきたー！」

バキィ

小椋「アフア！？なんでグーパンチ！？」

隼人「痛いかな？」

小椋「痛いわ！口から鉄の味がするんですけど！」

隼人「夢じゃないのか・・・？」

小椋「どうしたん？隼人、ていうかマジで痛いんですけど」

隼人「お前はここどこだと思ってるんだ？」

小椋「・・・平原・・・？」

隼人「そうじゃない！高低差のほとんど無いこんなに広い平原日本にはないぞ！？」

小椋「じゃあ外国・・・？」

隼人「日本にいたのにな？」

小椋「・・・あー、ほら、あそこに道あるし行ってみようぜ、歩いてたらその内人に会えるだろうし聞けば良いじゃん」

f r o m：平原の道　歩き始めて2時間（？）ほど

小椋「くくく」

おかしい・・・

隼人「なあ小椋、疲れたか？」

小椋「いや？全然？」

隼人「もう歩き始めて2時間くらいになるよな？なんで疲れないんだ？俺たち」

小椋「それは！鍛え抜かれた俺達の肉体のおかげじゃね！？」

隼人「俺たち万年帰宅部が何ぬかしてんだ、夢・・・にしては体に感覚あるしなんなんだ？」

意味がわからん、

小椋「そういえば俺さ、蔵で鏡のぞいてたら急にあの場所で立ってたんだよ」

隼人「ん？ちよつとまで、寝てたんじゃないのか？」

小椋「いや、鏡のぞいてたらあそこにて、んで、いつの間にか足元で隼人が寝てたんだよ」

隼人「そういえば・・・俺も鏡をのぞいてたら急に眠くなって気

づいたらあそこだったな」

てことは、ここにいる原因はあの紫の鏡か・・・？じゃあここはどこだ・・・鏡の中・・・とか

隼人「んなわけねえか・・・」

小椋「あ、そういえば、爺が俺に蔵に入らないように言ってたのは、鏡がどうか言ってたような・・・」

隼人「ん？ちょっとまで、盆栽の件のせいじゃねえのか？」

小椋「いや、たしかあれて中学入ったばかりの頃だったし、蔵に入るなって言われてたのは幼稚園の頃だったな」

隼人「それで？入るなって言われた理由は？」

小椋「確か鏡に飲まれるとか、別の世界に飛ばされるとか言ってたような・・・」

隼人「・・・やばい・・・信じたくないのに信じそうだ・・・」

小椋「おお！だとしたらここは異世界か！スライムとかドラゴンとかいるのかね！？」

隼人「お前は異世界だとしたらうれしいのか？」

小椋「あたりまえじゃん！異世界に召喚されし人間とかめっちゃかつこ良いじゃん！絶対勇者補正付いてるだろ！？」

隼人「お前・・・人に会っても、異世界から来たとか、勇者だとか言うなよ、頭逝ってると思われるわ」

なんか隣にアホがいるとこっちまで考えるのを放棄したくなってるな・・・

小椋「ん？あれ、馬じゃないか？」

小椋が後ろを振り向く

隼人「なんで俺達はあるんな遠くにいる馬が見えるんだ・・・というかあれは馬車かよ！？車じゃねえの！？」

外国でも馬車はありえねえぞ！

小椋「おおーい止まってー止まってくださーい」

小椋の声が聞こえたのか馬車がゆっくりと減速しながら目の前で止まった、止まった馬車は屋根の無い荷馬車のようなもので3人の人？が乗っていた一人は馬を操っていた30代くらいの男の人、腰には剣、防具はレザー防具というのだろうかRPG定番のような格好した人が一人、問題はここからだ、その後ろにはローブに木の杖を持った綺麗な金髪の少女だ、だが・・・耳が長い・・・もう一人の男？オス？もはや獣だ、獣人というのかもしれない、斧を持ち、体は西洋鎧みたいなものを着ていて側にはヘルムも転がっている

小椋「ひゃっほー！ほら！隼人俺の予想あたっただろ！？ぜったいここスライムとかドラゴンとかいるぜ！？」

隼人「まじか・・・？」

「???「あの、大丈夫ですか?」

耳の長いローブの少女が話掛けてきた!?言葉は通じるみたいだ、
どうする!

小椋「俺、小椋浩太って言います、ここから近い街ありませんか
?道を教えてほしいんですが」

「???「盗賊とかじゃねえみてえだな、丸腰だし、なんで丸腰なん
だ?」

獣人?が話掛けてきたとりあえず怪しまれるのはまずい・・・情報
がほしい・・・

隼人「えつと僕ら田舎からでてきたんですが、道がわからなくて
できれば教えてほしいのですが、武器は、色々あって荷物ごとなく
なつてしまいました・・・」

獣人?「武器と荷物もねえってことは食料や水もなくなしちゃった
のか・・・ここからフレイヤまでは歩きで2日はかかるぞ」

小椋「うげっ2日かぁ・・・」

まずいな・・・腹はいけるとしても水がきつい・・・

「???「まあ、困ってるみたいだし馬車に乗せてあげたらどうか
な、今日はもう暗くなりそうだからここで野宿して明日からってことで」

馬を操っていた人間の男の人だ

隼人「おお！ありがとうございます！僕は市原隼人と言います、できれば情報が全然こない田舎にいたもので色々お話を聞かせていただませんか？」

ウォル「良いよ、僕の名前はウォルⅡティード、ウォルって呼んでくれ、んで、そのローブの人がフォルⅡアリシア隣のゴツいの
がダリルⅡコータだ」

ダリル「ダリルって呼んでくれ」

フォル「よろしくね、あなたたちもフレイヤ学園の入学試験を受けにきたの？」

隼人&小椋「学園？」

f r i m：平原：夜

その場で話すのもなんだ、ということでは野宿の準備をしてから話そうということになり、パンと干し肉をもらい食事にありつけた、食事の後、この世界の事や学園の事の話色々してもらえた。

まず、この世界には3つの勢力があり、一つは東にある人間の国、リゲン大陸ここは人間の国だ錬金術が進歩している、そして西にあるのはアリフィア大陸ここはエルフや小人のような種族が暮らしている、そしてそういった種族は総じて魔力が高く魔法技術が進歩している、最後にハルド大陸ここは獣人の国で鍛冶の技術などが進歩している

そして今現在居る場所は3ヶ国のだ真ん中にある中立の場所フレイ

ヤ学園だ、このフレイヤ学園というのは国があるのではなく3ヶ国で資金と土地を出し合い最も争いが集中しそうな真ん中の土地に3種族が高いLvで学べる学園を作り三国とも争そわないように作られたものだ。

フレイヤ学園について、フレイヤ学園は3年制で、排出する人材を高レベルで育てるためかなり合格率は低い、毎年各種族100名づつしか取らず試験を受ける人はその数十倍はいるそうだ、試験内容はペーパーテストや実技テストではなく試験用の水晶に手をかざすだけで潜在能力がわかり、それを元に決めるらしく、落ちた人も潜在能力が低いと次の年からは受験できなくなる、水晶には潜在能力のほかにギフトと呼ばれる能力を見る事ができる、ギフトというのは生まれたときから与えられている能力であり、たとえば獣人などは「体力回復 小」大「 エルフなら「魔力増加 小」大」などが一般的で常時展開されているものだ。その中でもたまにレアなギフトや基本的に1つしかないのに2つ3つギフトが付く事があり、そういった受験者は潜在能力が満たされていなくとも優遇されるそうだ

魔物について、今居るこの場所にも魔物いるそうなのだが、ここはフレイヤ平原といい、肉食系の魔物はあまり遭遇しない、基本的に肉食系の魔物は森や林、などの身を隠す場所でないとい現れないそうだが、この3人の目的はダリルとフォルは学園の入学試験を受けに、ウォルさんはそういったフレイヤ学園の入学試験を受ける人たちを送るために、学園が雇った業者さんらしい

隼人「学園の入学試験はお金とか身分証なんかは、必要なんでしょうか？」

フォル「入学試験にお金は必要ありません、身分証も持っている方はいますがギルドに加入している方か上流階級の方しか明確な身

分証は無いので必要ありませんね、ただ、入学出来た場合の学費は学園生活内で学園に入ってくる依頼をこなした報酬で払うか、卒業後の働きでのお金を返していかなければいけません」

小椋「学費は高いのか？」

フォル「金貨100枚ですね」

その後も色々教えてもらい、お金の単位がわからないので聞いたところ、びつくりされたが教えてもらえた、

小銅貨10枚で銅貨1枚

銅貨100枚で銀貨1枚

銀貨50枚で金貨1枚だそうだ

ちなみにお昼にかかる1食分のお金が銅貨3〜4枚

学費たけえ・・・

ダリル「まあ学費はたしかにたけえが学園に入ればそれ以上の収入は取れるようになるからな！問題ねえ」

小椋「おお！隼人試験うけようぜ！俺達が落ちるわけないぜ！」

なにその自身・・・怖い・・・

三話目 平原と非日常（後書き）

友達に見せたら日常系のほうが面白いつて言われた・・・
それでもっ！俺はファンタジーが好きなんだ！

四話目 脂身はどこまでも脂身

f r o m : 馬車の上 : 昼

俺達はこれから行く当ても無いのでフォルさんやダリルに誘われてフレイヤ学園の受験を受ける事にした、フレイヤ学園は各種族から100名づつ取るので人間の受験者が増えても自分たちは変わらないし知り合いが増えるのは嬉しいらしい

隼人「ウォルさん、フレイヤ学園には後どれくらいで着くんでしょうか？」

ウォル「ん？そうだね、今日の夜くらいには着くと思うよ」

夜か・・・歩くよりはだいぶ早いんだろうけど、馬車って結構揺れるんだな、尻が限界なんだが・・・

フォル「あ、あの」

隼人「ん？なんですか？」

フォルさんが遠慮気味に話かけてきた、ちなみにフォルさんは年下かと思っただが同じ年だった

フォル「コータさんはなんで私をずっと見ているんでしょうか？」

コータとは小椋の事だ浩太がコータに聞こえるらしい

隼人「そりゃフォルさんが綺麗だからじゃないですかね？」

小椋め・・・綺麗だからって凝視するのはどうなんだ・・・

フォル「え、ありがとうございます／＼／＼でもなんだか、口ずさみながら見ているのですが・・・」

俺は後ろにいた小椋を見てみた、なぜか体育座りだ

小椋「ハアハアハア・・・エルフ耳が俺のパトスを熱くするヤバイヤバイ、あの耳をハミハミしたい・・・ハアハア」

・・・よく見るとフォルさんは震えていて、ダリルは小椋の荒い息に引いている・・・

脂身エ・・・ゆるぎねえな・・・

隼人「馬車からおろしますね？」

フォル「え！？友達じゃないんですか？」

隼人「俺の友達に変態はいません・・・オルア！」

小椋を馬車から蹴り落とす、小椋は地面に転がり数秒ビクビクツツとした後、起き上がって追いかけてきた

小椋「ちよつ、まって俺何かした！？幸せな世界に居たような気がするのに口の中が砂まみれなだけだ！」

隼人「お前つ、女の人をつ、凝視するのつ、禁止だっキモイんだよ！」

乗り込んでこようとする小椋を蹴り出す

小椋「違うつ、これっ、 はっ 、愛だよ、はぶっ、」

フォルに向けてウィンクする小椋、蹴られながらもパトスをとめねえのか・・・

隼人「そんなだからお前顔はそこそ良いのに彼女できねえんだよ！」

小椋は女子に人気はあるが基本的に学校では女子とあまり話さない（小椋直接話すとウザイから）だから女子とはメールでの会話が基本だった

小椋「違うつ！彼女ができないんじゃない！みんな俺が眩しすぎて遠慮してるだけなんだ！」

小椋が走りながら必死で否定している

隼人「ウォルさん、スピードあげてもらえませんか？」

小椋「NOOOOO！！まって！！、すいません！もう凝視しませんがあああ」

隼人「フォルさん反省してるみたいだし許してあげてもらえませんか？」

フォル「え、あ、はい、大丈夫です、フフ」

後ろを見てみると3人とも笑っていた

小棕「ふう・・・本当においていかれるかと思った・・・」

ダリル「ダッハッハッハ、お前らマジで面白えな」

フォル「怪我とか大丈夫なんですか？馬車から蹴りだされた時、顔から落ちてましたけど」

隼人「そういえば怪我してねえな」

小棕「怪我してないのを疑問に思ってるのに蹴りだすって、怪我させる気満々じゃん・・・」

from：馬車の上：夕方

小棕「お、なんかでかいのが見えてきたぞ！」

フォル「あれが、フレイヤ学園の城壁ですね」

隼人「想像よりだいぶでかいな毎年300人が入るってことはそこまで学生いないんじゃない？」

フォル「3ヶ国の中立時点なので商人とかが良く通るんです、だから3ヶ国の首都並みに大きい街ですね」

隼人「なるほど、そりやでかいはずだ・・・」

これを見ると本当に異世界なんだなあ・・・

小椋「それで！？受験はどこで受けるんだ？」

フォル「あの一番大きい建物でやるそうですよ」

城じゃん・・・

隼人「すごいな、受験って日にちとか決まっていらないんですか？」

フォル「受験はもう3日前から始まっています、そこから10日間の間であれば朝から夕方まで受ける事ができますね」

小椋「あれ、じゃあ今日は受けれない・・・？」

ダリル「そうだな、学園が手配してくれてる受験者用の宿があるらしいからとりあえずそこで泊まることになるな」

隼人「宿まで手配されてるのか・・・」

ダリル「まあ1日しか泊まれねえけどな、受験おわったら用無しだし」

隼人「え？合否の発表って受験日最後以降にわかるんじゃないのか？泊まれないとまずいな」

フォル「いえ、仮の合否はその場で出ますよ、仮合格した場合、別の旅館に案内されます」

隼人「ん？それだと早く受験したほうがいいんじゃないのか？人数決まってるし」

フォル「明らかに合格な場合はそのまま学園内の部屋に案内してもらえますが、なかなかありませんね、100位以上の合格判定だと学園が手配している別の宿で待機になります、そして自分より高い判定の人が現れると繰下げられて100位以下に落ちると出て行ってもらうそうです」

隼人「何その合否判定・・・生殺しだろ・・・」

小椋「胃がちぎれるんじゃない？待ってる間」

フォル「胃薬は必須だそうですよ」

・・・この学園コエエ・・・

五話目 心荒む宿

f r o m : 受験者専用宿前：夜

俺達はウォルさんに受験者専用の宿の前まで送ってもらい、お礼を言つてウォルさんと別れた

隼人「あゝやつと着いた、尻が崩壊寸前だわ」

小椋「何っ！俺じゃないとしたら誰に掘られた！？ダリルか！」

隼人「てめっ、こんな人通りの多いところで勘違いされるような発言してんじゃねえ！」

小椋「そんなっ俺、心配してるのにつ！」 ゲイツ 「アンツ
ッ」

ダリル「誰が掘るだコルア！」

あ、ダリルがキレて小椋がアイアンクローされてる

小椋「ア”ア”ア”ア” -！！マジで痛いっ！でもっ、感じち
やうッ」（ビクンビクン）

小椋は最後に気色悪い発言をして気絶した

ダリル「こいつ、初めは面白え奴だと思ってたんだが、だんだん
ウザくなってくるな、発言と行動が逝つてやがる」

隼人「脂身だからな、初めは旨く感じるんだが、食いすぎると、あとから気持ち悪くなるんだよ」

ダリル「脂身・・・たしかに言えてるな！」

ダリルと俺達は馬車の上で雑なしやべり方が合ったのかかなり仲良くなった小椋の扱いにまだ慣れてはないようだが　ちなみにダリルは狼の獣人らしい、他にも猫や鼠などもいるらしい

隼人「あれ、フォルさんは？」

ダリル「あそこいるぞ」

ダリルが指差すとフォルさんは気まずそうに視線を逸らした、というか距離が遠い

隼人「完全に引かれてるな、このヴァカのせいで」

フォルが気まずそうに近づいてきた

フォル「すみません：周りの視線に耐えられなくて」

隼人「あー、うん、仕方ないと思いますよ、この気持ち悪さだし」

ダリルの脇で抱えられて、ニヤケ顔で気絶している小椋を指差す

フォル「つつ、そうですね、とりあえず宿に入りませんか？一人1つ個室をもらえるそうなので」

隼人「一日とはいえ個室なのか」

学園パネエ・・・

from：受験者専用宿：一人用個室（自室）：内

隼人「あー、やっと一息ついた」

ちなみに気絶した小椋は借りた鍵と一緒に部屋に放り投げた・・・床に

隼人「異世界か・・・」

俺だつて男だ夢と冒険にあふれる世界にこれたとしたら嬉しい、だが・・・

隼人「なぜ小椋となんだよ！」

色々な面で難易度が無駄に上がってクソゲーと化してるじゃねえか！

???「つう、やめてください！近づかないで！」

廊下の方から女の人の悲鳴のような声が聞こえてきた

隼人「ナンパかなんかか？まあ、俺には関係ないし、学園管理の宿なんだから誰かが止めるだろ」

知り合いでもないのに助けるなんてアホくさい・・・

???「ハアハアハア・・・猫耳が俺のパトスを熱くするヤバイヤバイ、その耳をハミハミしたい・・・ハアハア」

・・・・・・・・・・チックショオオオー！！

バンッ （扉を開ける音）

ダッダッダッダッ （廊下を走る音）

隼人「オルアー！！」

俺は、獣人の少女にすり足で近づく変態に己の全力を乗せたドロップキックを蹴りこんだ

小椋「アグアアアア！！！」

俺の全力を乗せたドロップキックは見事命中し変態を壁に叩きつけた

小椋「つく・・・わが生涯に一片の悔い無し・・・ガフッ」

隼人「後悔の塊みてえなやつが悔い無えわけねえだろ」

猫耳娘「あ、あの、あの人大丈夫なんですか？すごい飛びましたけど」

話かけてきたのはさっきまで変態の脅威に晒されていた猫？の獣人の女の子だ、身長は俺の胸ほどまでくらいしかなく、銀色の髪をしている、獣人といってもダリルのような獣が二足歩行になったような獣人ではなく耳と尻尾以外は人間と変わらない、獣人の女はなぜか人間っぽい感じになっているそうだ 具体的に言えば人魚と魚人的な違いだ

隼人「ああ、たぶん体は大丈夫だ、頭はダメだが」

猫耳娘「あ、あの人と、お知り合いなんですか？」

獣人の少女は不安げな瞳でそう聞いてきた、くっそ！あいつと知り合いつただけで、こんないたいけな少女に不信感を持たれてる、泣きそうだ！

隼人「あー、うん、不本意ながら知り合いなんだ、俺に免じて許してもらえないかな、あいつ馬鹿だけどアホなだけなんだ」

ダリル「ん？おいハヤト、なんでコートはそんなところで気絶してんだ？さっき部屋に放りこんだだよ」

ダリルが後ろから偶然歩いてきて俺に話しかけてきた、チャンスだ！同じ獣人ならこの不穏な空気を一掃してくれるかもしれん！

隼人「ああ！実はこの娘に小椋の奴がまたやらかそうとしたから蹴りで気絶させたんだよ」

ダリル「マジか、本気で気絶させたのに回復早えな・・・んでその子はどこにいるんだ？」

・・・ん？見渡してもさっきまでそこにいた獣人の娘はいなくなっていた

隼人「あれ？さっきまでそこにいて話してたんだけどな・・・帰ったのか？」

ダリル「ふーん、まあとりあえずコートを部屋にまた放り込むか」

隼人「あ、ああ、次は部屋から出ないように縛っておくか、また襲うかもしれん」

ダリル「そうだな」

そうして俺達は小椋をベットに縛り付けて自室に帰っていった

六話目 試験日 前半

f r o m : 受験者専用宿：一人用個室（自室）：朝

カラン♪

カラン♪

カラン♪

鐘の音・・・？

隼人「んう・・・？朝か」

カラン♪

カラン♪

カラン♪

隼人「鐘、鳴らしすぎだろ、うるせえし・・・」

鐘が鳴り止んだ瞬間から宿内に人が慌しく動き出したような気配が
しだしたな

隼人「朝を知らせる鐘かなんかだったのか？」

ガチャツ
（扉を開ける音）

小棕「オッス、オラ小棕、今日もいつてみよー！」

なん・・・だと!？

隼人「お前、ロープはどうした？ベットに縛り付けたはずだが・
」

ガチャリ（扉を閉める音）

小椋「…………ツフ」(ニヤリ)

ツイラ(怒)

コンッコンッ (扉をノックする音)

ダリル「おい、ハヤト起きろ、朝飯食って試験に行くぞ」

ガチャ (扉を開ける音)

ダリル「ん？コータも起きてたのか、ハヤトが縛り解いてやったのか？」

隼人「いや、こいつ自分で解いてきたみたいだぞ」

ダリル「は？あれを一人でか？」

ダリルは小椋の方を見た

小椋「…………ツフ」(ニヤリ)

(イラッ(怒))

ダリル「朝から不快にさせる奴だ」ゴキゴキ(手を鳴らす音)

隼人「ああ、」ブンッブンッ(腕を回す音)

小椋「ちよっ、まって、冗談だって！」

」！

隼人「お前に優しくしたことなんてないだろ・・・」

ダリル「そうか？コータと昔から友達なんだろう？奇跡的なほど優しいじゃねえか」

隼人「おお！」

もつともだ！

小棕「おお！じゃないよっ、まったく、そんなことより早く飯食って試験に行こうぜ！」

隼人「そうだな、腹減ったし、そういえばフォルさんは？」

ダリル「ああ、同郷の知り合いがいたらしくてな、その友達と試験受けにいくらしいぞ」

小棕「そ、そんな！き・・・貴重なエルフ耳要素がっ・・・エルフ耳・・・ハアハア」

隼人「それ以上変態を加速させるなら締め上げるからな」

小棕「ツハ！？う・・・うう・・・エルフ耳があ・・・（泣）
orz」

ダリル「おらっ、泣いてねえでさっさと食べるぞ」

隼人「ほっとけ、アホにかまってられん・・・」

f r o m：フレイヤ学園：門前

隼人「でかすぎじゃね？3年生までしかねえのに、ここまで土地と建物デカくする意味あんのか？」

ダリル「まあ訓練場とかあるしな、魔法実習場とかは特に広くなえとあぶねえし、あと建物がでかいのは寮も中に入ってるからだな」

隼人「つか、あそこに見えるのはアリーナか？」

ダリル「ああ、そうだな生徒同士の決闘や闘技大会で使われてるらしいぞ」

隼人「3ヶ国の中心点だからって学校内にアリーナはやりすぎだろ・・・」

ダリル「まあフレイヤ学園はこの都市の象徴だからなあ別の場所に作る意味も無ねえし」

隼人「なるほどなあ」

ダリル「お、あそこが受付みたいだぞ、行くか」

隼人「む、ちょっとまってくれ」

ダリル「ん？どうした？」

隼人「小椋はどこいった？」

ダリル「・・・・・・・・」

隼人「・・・・・・・・」

あいつは・・・また勝手な行動を・

ダリル「どうする・・・」

隼人「頭が痛エ・・・大丈夫だ探す方法はある、耳をすませば自然と分かる」

ダリル「ん？どういうことだ？」

???「いやー！気持ち悪いっ！近づかないでー！」

ダリル「・・・・そういうことか・・・」

隼人「いくか」

ダリル「ああ・・・」

俺たちは女の人の悲鳴が聞こえた方向へ走り出した、変態を止めるために

七話目 試験日 後半

from：フレイヤ学園：試験受付

受付「では、試験にお受けになる方は三名様でよろしいでしょうか？」

小棕「んー！うもー！！」

ダリル「ああ、三人でたのむ」

俺とダリルは無事少女の救出&変態の捕縛に成功し猿轡+簀巻きにして小棕(変態)を受付までダリルが肩に担いできた(これ以上暴走しないように)しかもなぜか縛られて恍惚気味だ

小棕「んふー！んふんー！」

受付「では、試験は3名様一緒に受けていただきますので、この番号札をお持ちになって15番の部屋に入ってお待ちお願いします、

」

隼人「はい、ありがとうございます」

受付さんから15番と書かれた番号札を受け取り歩き出す

from：フレイヤ学園：廊下

隼人「なあ、あの受付さん、小棕の状態を見ても何も反応しなかったぞ」

ダリル「ああ、あれは猛者だな」

隼人「この学園・・・あなどれん・・・」

小椋「お、15番の部屋ってここじゃね？」

ダリル「うお！？何時の間に拘束解きやがった」

小椋「・・・・・・・・ツ」 （ニヤリ）

ドサツ！

あ、ダリルの肩から小椋が叩き落された

小椋「あぐふっ！石床に落とされるのは痛いっ」

隼人「つか、試験部屋20部屋もあるのかよ」

ダリル「まあ、それくらいねえと捌ききれないんだろ？水晶に手をかざすだけの試験つっても試験説明とかもあるだろうしな」

隼人「ふむ、まあいいや入るぞ」

ガチャ （扉を開ける音）

from：フレイヤ学園：15番試験部屋：内

ボタンッ （扉が閉まる音）

隼人「おーあれが試験用の水晶か」

部屋の入って見えてきたのは部屋の一番奥に直径1mくらいの大きい透明の水晶玉だ

小椋「おー！でかいな！」

ダリル「あの椅子に座って待つてりやいいのか？」

隼人「そうじゃね？待つてたら試験の先生が来るんじゃないか？」

小椋「イスがフツカフカだずえー！」

隼人「イスの上で跳ねるな！うつとうしいっ」

ダリル「お前ら、全然緊張してねえのな……」

小椋「緊張？ナにそれ美味しいの？」

隼人「小椋に緊張なんて感情あるわけねえだろ」

ダリル「……ハヤトはどうなんだ？」

隼人「俺は小椋で慣らされてるからな、俺が緊張を切らした時が小椋が奇行に走る時だから」

ダリル「緊張しないのは羨ましいが、その慣れ方は嫌だな」

隼人「ダリルは緊張してるのか？……おいっ小椋！珍し

いものが多いからって部屋の物いじるな！」

小棕「チエツ、ちよつとくらい、いいじゃん」 ボスンッ（イスに座る音）

ダリル「お前ら見てると緊張してるのがアホくさくなってきたわ」

隼人「よかったじゃん」

それからしばし待つこと数分

ガチャッ（扉が開く音）

ボタンッ（扉が閉まる音）

試験官「こんにちは、私はこの学園の魔法課教師のセリムⅡフォー
ルです、あなた達の試験官をつとめさせて頂きます」

入ってきた試験管は小人種族だろうかエルフよりも小さめの尖った
耳に青い髪をした少女だ・・・大丈夫なのか？

セリム「ちなみに私の歳はあなたたちのよりもかなり上なので心
配は無用です」

心を読まれた！

小棕「すげえ！心を読まれた！」

セリム「心を読んだわけではありません、小人族は小さく長寿なの
でこういう勘違いはよくあるんです、慣れているのであなたたちの

顔を見れば分かります」

隼人「ああ」　そういうことか・・・

セリム「では、試験の説明をします。この水晶玉に手を当てていただくで潜在能力「体力：筋力：精神力：知力：魔力：敏捷度：器用度」を計りF～SSの段階で水晶内に表示されます。一般平均はDランクで、す、このランクがDから高ければ高いほど評価点は上がります。潜在能力と共にギフトの表示もされますので、それも評価に加えていただきます。評価終了後に水晶が今まで受験した方かたと比較し順位が表示されます、1～10位の場合そのまま合格となりますがそれ以下の場合、つまり11位～100位の方には別に宿を用意されていますのでそこで自分より高い人があらわれ100位以下に落ちなかった場合合格となります。ちなみにこの場で100位以下、もしくは自分より高い順位が出て繰り下げで100位以下になった場合は不合格となりますのでよろしくお願いします。」

フォルさんが言ってた通り、えげつない試験内容だなあ

セリム「何か質問はありませんか？」

隼人「はい、潜在能力の知力や体力はなんとなく分かるんですが精神力は何に影響するんでしょうか？」

セリム「精神力は錬金術で魔力を入れる際や魔法を行使する際などの魔力操作に影響してきますね魔力の器用度だと思ってくれば大丈夫です。他に質問はありませんか？」

集中力みたいなもんか・・・

小椋「はい！先生は、彼氏いまs・・・」

隼人「だまらねえと玉潰す」（小声）

小椋「・・・なんでもありません」

セリム「・・・では質問も無いようなのでダリル＝コータさんから水晶に手をかざしてください」

ダリル「お、おうっ！」

あ、ダリル緊張してる

ダリルが手をかざしてセリム先生が呪文みたいなのを唱えると水晶の中に光の粒子のような物が出てきて文字になった

名前	：ダリル＝コータ
種族	：獣人（狼）
潜在能力	
体力	：A
筋力	：S＋
知力	：D
魔力	：F

精神力 : C

敏捷度 : A +

器用度 : C

ギフト1 : 筋力増加(大)

順位 : 18位

小棕「うおっダリルすげえ！知力と魔力以外全部平均以上かよ」

隼人「このステータスで18位なのか？上にどんなのいるんだよ」

セリム「種族別の順位ですしね、獣人族は身体的なステータスは高いのです。狼の獣人は敏捷度と体力が高く筋力が弱めなのですがギフトの筋力増加にくわえ効果の値が(大)なので弱点を補って良い結果になってますね」

隼人「今日もう5日目だしこれは受かったんじゃない？ダリル」

セリム「そうですね、今の時点で20位ならば受かる確立はかなり高いです、日がたつことに受ける人も減りますし、高ランクの方は早めに受験してますから」

小椋「ダリルおめでとー（ノ^^ノ）」

ダリル「お、おお！ありがとうございます！-」

小椋「あ、ダリル半泣き」

隼人「茶化すなや」

今はそつとしといてやれよ・・・

セリム「では、次はコータオグラさん手をかざしてください」

小椋「いくぜー！」

小椋が手をかざしてセリム先生が呪文みたいなのを唱えるとさっきと同じように水晶の中に光の粒子のような物が出てきて文字になった

名前	：コウタ〓オグラ
種族	：人間
潜在能力	
体力	：B
筋力	：C +
知力	：F -

魔力 : D +

精神力 : C

敏捷度 : B

器用度 : D

ギフト1 : 超回復

ギフト2 : 魔力感知

ギフト3 : 状態異常無効

順位 : 合格

突っ込みどころ満載すぎだろ・・・

隼人「順位が合格になってんだけど」

セリム「おめでとうございます、1位ー10位の方は順位の上下が付けにくらしく順位はできませんが合格となります」

小棕「俺の時代キターーーーー!!!」

隼人「おいおい・・・知力F-の馬鹿がトップクラスにいていいのかよ・・・」

セリム「おそらくギフトの数でしょうね、希少なギフトが3つも

ありますし・・・特に魔力探知は魅力的ですね、国家から引つ張りだこになるかと」

もはやダリルは口を開けたまま放心してる

隼人「そうなんですか？」

セリム「魔力感知ができるということは魔力でできたトラップや魔力のこもった鉱石や草など貴重なものの発見：発掘も容易になりますから」

小棕「ひゃっほー！」

隼人「しかも超回復と状態異常無効って・・・良い肉壁になるな」

セリム「では、次はハヤトⅡイチハラさん手をかざしてください」

小棕「お前ならできる！元気があればーなんでもできる！」

隼人「あゝはいはい、がんばります」

どうがんばるのかはしらんが

俺が手をかざすとセリム先生が呪文みたいなのを唱えた二人同じように水晶の中に光の粒子のような物が出てきて文字になった

名前 ：ハヤトⅡイチハラ

種族	：人間
潜在能力	
体力	：C -
筋力	：D
知力	：B
魔力	：S
精神力	：SS
敏捷度	：C
器用度	：A
ギフト1	：魔力増加（大）
ギフト2	：異空間収納
ギフト3	：武器重量感無効
順位	：合格
小椋「おっしゃー！流石ブラザー！」	
隼人「武器重量感無効と異空間収納ってなんだ」	

セリム「す、すごいですね2連続で合格がでたのは初めてです、異空間収納は自分が触れている自分が持てる重量までの物を念じて出し入れできるギフトのようです、かなり珍しいですね・・・今現在そのギフトを持っている人はあなた意外確認されていないようです、武器重量感無効は持っている武器を重量0の感覚で武器を振れるスキルですね、しかし、武器自体の重量はそのままなので威力は落ちません」

隼人「おーそれは便利だわ、ラッキー♪ 部屋で試してみるか」

小棕「いいなあそれ、俺にも見せてくれ」

セリム「では、お二人は合格いたしましたので、このままお住まいになる寮へ案内させていただきます、その後ダリルさんを仮合格者用の宿へ送らせていただきますので、この部屋でしばしお待ちください」

見てみるとダリルはまだ放心していた

小棕「おーいダリル？」

ダリル「あ、ああ、おめでとう」

隼人「ダリルも合格同然だし、そっちに遊びにいくわ、5日も部屋でいるの暇だろ？俺も暇だし」

小棕「あそぼうZE」

ダリル「なんか、お前らの見方変わったわ・・・」

そうして俺たちの試験はほぼ全員合格で終わった

八話目 脂身の明日はどっちだ

f r o m：フレイヤ学園：廊下

俺たちは試験が終わった後、試験官だったセリム先生にこれから住むことになる部屋へ送ってもらっている

隼人「広いな・・・不便じゃないのか？この広さ、扉も多いし」

何ここ宮殿？

セリム「すぐに慣れますよ」

俺たち二人の前を進んでいるセリム先生が答える・・・慣れるのか？

小棕「なあ隼人」（小声）

隼人「ん？」

小棕「これだけ扉があるんだ、間違って開けて女子更衣室だとしても怒られないよね？」（小声）

脂身エ・・・

隼人「やめとけ・・・ここでそんな事やってみろ、土下座じゃすまんぞ、普通に魔法でミンチにされるかもしれん」

ここは前に居た世界と違って魔法があるんだ個人の戦闘力が半端じゃないだろ

小棕「ツハ！魔法だよ魔法！」

隼人「魔法がどうしたよ？」

小棕「透視の魔法とかあるんじゃない？それさえあればああ！」
(小声)

隼人「そんな都合の良い物あるかよ」

小棕「セリム先生！！俺、魔法をつ覚えたいです！」

こつという時の向上心は半端じゃないな・・・つか話聞け

セリム「人族の方が魔法をですか？珍しいですね、人族の方は錬金術課か戦士課に進む事が多いのですが」

隼人「え、人族が魔法課ってそんなに珍しいんですか？」

セリム「人族の方は魔法を使える体ではないので、潜在魔力も大体の方は低めですし、使えるには使えるのですが体への負担が高いんです、ですので錬金術でゴーレムを作って魔力を流し込むなどして戦う人が多いですね、他にも身体能力を上げる薬や珍しい魔法具を作ったりする方もいます」

隼人「ちなみに体への負担ってどんな感じなんですか？」

セリム「低級魔法なら痛みを感じる程度ですが、上級魔法を使おうとすると死ぬ事はありませんが激痛が走り皮膚が裂けたりしますね」

怖えええええ！

隼人「俺はやめとくか・・・小棕と違ってマゾじゃねえし」

小棕「ちよつ、さすがの俺も自分で産む痛みには感じないからね！？」

否定する所が違つぞ、マゾを否定しろ・・・

隼人「でもお前たしかギフトで超回復があつただろ？それあればいけるんじゃない？」

セリム「たしかコータさんは潜在魔力はD+でしたね、そうしますと魔法剣士課へ進むのがよろしいかもしれません、D+の魔力では中級魔法まで覚えるのが精一杯でしょうし、魔法剣士課ならば補助魔法を自分に掛けつつ戦えますから重宝しますよ」

小棕「そ・・・そんな！俺には透視の魔法は使えないのかああ！」

こいつ暴露しやがつた

隼人「いや、透視の魔法があるかどうかもわからねえからな？」

小棕「え、ないの？」

え、なんでこいつあるのが確定してる感じになつてんの？

セリム「透視の魔法というのがどういうものか私は知りません

が遠見の水という上級の錬金術ならありますよ」

隼人「それって名前の通り効果は遠くを見たりすることができるんですか？」

セリム「効果はたしか、一度行つて見たことのある場所を何時でも水に映し出し見ることができる錬金術だったと思います」

小棕「隼人！俺、錬金術師になる！」

隼人「お前、ほんとわかりやすいのな」

セリム「ただ、錬金術で作った物は上級の物ほど扱うのに高い魔法制御力と魔力が必要です。で遠見の水は上級者じゃないと発動できませんね」

隼人「お前馬鹿だしムリなんじゃね？」

小棕「そ、そんなつ！俺つがんばるからっ！」

小棕がなぜか半泣きで俺にしがみつく、気持ち悪い・・・

セリム「ハヤトさんなら錬金術課に入ればすぐに上級者になれるかもしれませんね、器用度もBと高かったですし魔力はギフトの効果でSまであがってました、魔法制御力が影響する精神力もSSなんてなかなかでませんよ？」

現実世界でプラモとか好きだったせいかな？器用度が高いのは

小棕「隼人様、下僕と呼んでください」

小椋が方膝ついてきた

隼人「考えが透けて見えるぞ」

自分が出来ないからって俺に発動させる気がこいつ

セリム「できれば魔法課に入ってほしいのですが・・魔力の高い人族の方は珍しいですし」

隼人「痛いのはちよつと嫌です」

激痛な上、皮膚が裂けるなんて嫌すぎる・・

セリム「残念です・・では、こちらがハヤトさんの部屋でその隣がコータさんの部屋になります、試験が終わるまでお待ちください、食事などは時間になりましたら係りの者が部屋に持ってきます、不在の場合はテーブルに置かせていただきますので、よろしく願います。」

いつの間にか部屋についていたらしい、てか食事持ってくるの？食堂とかじゃないのか、もはや学生の身分じゃねえよ

隼人「あ、すみません仮合格者の宿ってどこにあるんでしょうか？」

これ聞いておかないとダリルのところに行けない

セリム「学園を正面の門から出たすぐ目の前の宿です」

近っ！もしかしてその宿も学園の物なのか？

隼人「ありがとうございます、これからよろしくお願いします」

セリム「はい、よろしくお願いします、では」

そういつてさっき俺達が来た道を帰っていった、ダリルを宿に送るんだっけ

隼人「とりあえず部屋に入るか、ダリルの所に行くのは明日でいいだろ？」

小椋「そうやね、んじゃ後でそっち行くわー」

隼人「はいはい」

ガチャ （扉を開ける音）

from：フレイヤ学園：自室

バタンッ （扉が閉まる音）

隼人「広え、なにこの広さ学生の部屋にこんな広さ必要なのか？」

入った部屋は中央に畳6畳ほどのでかいテーブル、空の本棚、部屋の端には綺麗なベットがある部屋だ

隼人「何事も広く無いとダメとか校則でもあんの？30畳くら

「いるんですけど」

掃除がめんどくせえよ・・・しかもなぜかこんなに広いのに風呂場が無い、トイレはあるのに

隼人「この世界の生活水準がわからねえ・・・」

風呂は共同風呂か？

隼人「もしかして町の様子を見るにそんなに文化が進んでなかったように見えなかったから風呂ないのか？」

この世界はまさに中世ヨーロッパ風だ

隼人「まあ最悪水を沸かして体を拭けば良いか」

いや、錬金術って割と何でもアリそうだから体を綺麗に保つ物でも作るか？

隼人「俺のステータス的に錬金術が一番よさげだしな」

あ、ステータスといえば

隼人「俺のギフトで異空間収納ってのがあったな、何かで試すか」

テーブルの上にあった空の小さな花瓶を手を持った

隼人「これでいいか、たしか触れているものを念じるだけで良
いっていったな」

俺は消えろと念じてみた、するとツフッと何の予兆も無しに花瓶が消えた

隼人「うおっマジで消えたぞ！」

やばい小椋じゃないがテンション上がった！次は出て来いと念じてみると花瓶が出てきた、そうして何回か遊んでいると

ガチャ！（扉を開ける音）

小椋「隼人ー！遊びにきたぞう！って何やってんの？花瓶なんて持って」

小椋が部屋に入ってきた、ノックぐらいしろ・

隼人「ああ、俺のギフトに異空間収納ってあっただろ？あれを試してた、見てろ」

俺は小椋が見ている花瓶を念じて消してみた

小椋「おお！まじで消えた！いいなー俺もそういうギフトがほしいわ」

隼人「お前は超回復：魔力感知：状態異常無効だっけか？」

小椋「できれば、空飛べるのがほしかったわ」

隼人「あーそれはいいな」

小椋にしては夢がある事言っな

小椋「窓から覗きし放題だしな！」

なるほどな、小椋だしな・・夢の方向を間違ってるだろ

隼人「魔力感知ってあったじゃん？お前何か感じたりしねえの？ここ魔力出す物とかもあるだろうし何か感じるんじゃないのか？」

小椋「いや、それが何も感じないんだよねえ」

隼人「そうなのか？俺の異空間収納みたいに条件があるのかもな、これ触れてないと収納できねえし」

そう言って俺は花瓶を出し入れしてみた

小椋「そうかも、今度セリム先生に聞いてみるわ」

あ、そういえば生物とかも収納できるのか？

隼人「・・・小椋ちょっとこっちきてみてくれ」

小椋「ん？何？」

小椋がこっちに近づいてきた

ガシッ

小椋の手を掴み「消えろ！」と強く念じてみた・・・しかし小椋は消えなかった

隼人「ツチ！、生物は収納できないのか・・・」

小椋「ちょおおお！！？？なにそれ！いきなり人体実験！？せめて犬とかから試してよ！」

隼人「犬が可愛そうだろうが、バラバラになって出てきたらどうする」

小椋「ちよつ！俺、犬以下！？しかもバラバラって！？そんな可能性があるかもしれないのになんで俺で試すの！？」

隼人「あー、うるせえな、別に良いじゃんバラバラにならなかつたんだから」

小椋「よくない・・・よくないよおおお！！」

ガチャッ！（扉を開ける音）

ボタンッ（扉が閉まる音）

小椋は結構ショックだったのか泣きながら俺の部屋から出て行った、まあアホだから明日には忘れてるだろう

八話目 脂身の明日はどっちだ（後書き）

毎日投稿しようとしてたのですが今回遅れました><
昔絵を描いてた経験があつたから挿絵でも描こうかな？
と思つたら腕が鈍りすぎてて断念しました・・・

漫画形式の絵が描きたかつたの！
というか漫画が描きたかつたの！

九話目 衝撃の痛み

f r o m：フレイヤ学園：自室：朝

カライン ♪

カライン ♪

カライン ♪

鐘の音・・・

隼人「朝か、」

カライン ♪

カライン ♪

カライン ♪

鐘の音は建物の中から聞こえる

隼人「学園の鐘だったのか」

そういえば昨日、部屋を貰った後、小椋と話してたらなぜか泣きながら小椋は出て行って、その後も小椋は部屋に来なかったな、届けられた飯が美味しかったから忘れてた・・・

隼人「しゃあねえ、小椋起こしてダリルの所に行くか」

f r o m：フレイヤ学園：小椋の部屋：前

ガチャ（扉を開ける音）

隼人「小椋起きろ！ダリルの所に行くぞ」

返事が無い、居ないのか・・・

隼人「朝っぱらからどこ行きやがった、またあいつの中の変態が暴走したのか？」

探すか・・・

f r o m : フレイヤ学園・受付

隼人「あの、すいません」

受付「はい、なんでしょうか」

隼人「気持ち悪くて身長が俺よりも高めの気持ち悪い人族を見かけませんでしたか？」

大事だから2回言いました

受付「お探しの方のお名前はなんと言いますか？」

隼人「オグラ」コウタです」

この受付さんも固定の笑顔保ったままで話続けてくるよ、怖えーよ！

受付「試験合格者のオグラ様は学園外へ外出中のようです」

隼人「え、わかるんですか？」

この学園の受付は何、神？

受付「合格者の方はすでに学園に生徒として登録されていますので、こちらの水晶に情報が入っております。学園内のどちらの区域にいるかもわかるようになっております。」

便利だな、常に小掠警戒してくれねえかな・・・

隼人「学園外的位置はわかりませんか？」

受付「残念ながら学園内での位置までしかわかりません」

まあどうせダリルのところだろ

隼人「そうですか、ありがとうございました、心当たりがあるので行ってみます」

受付「はい、行つてらっしゃいませ」

f r o m：仮合格者専用宿前：朝

学園正面にある壁で囲われてる宿に入ろうとしたところで、ふと気づいた

隼人「あ、やばい俺ダリルの部屋どこかわからねえ・・・」

ガッ カランッ

ガッ カランッ

ガッ カランッ

ダリル「おい、もうへばったのかよ」

小椋「ごめんなさいい！なめてましたあ！斧って結構重かったんですう！」

ダリル「文句言ってねえでさつさと割れ、俺は手伝わねえからな」

聞き覚えのある声がしたので敷地に入って庭に入るとなぜか小椋が薪割りしていた・・・なぜ？

隼人「何やってんだお前ら？」

小椋「ああん！ハヤトオー！だずげでえ！」

小椋が走りよってきて泣きながらしがみついていた・・・気持ち悪い

隼人「意味わかんねえし、なんで薪割りなんてやってんだ？」

ダリル「自業自得だ」

小椋「ちがう！俺をバラバラにしようとした悪魔のせいなんだ！」

隼人「は？悪魔？」

ダリル「昨日ハヤトにバラバラにされそうになったとかで、こっちに泣きついてきやがったんだ」

隼人「俺かよ、お前あの後ダリルの所に行ったのか、つかバラバラにしようとしたわけじゃねえよ、俺の異空間収納のギフトで

生物も収納できるか試ただけだろ？・・・小棕で」

小棕「だからなんでそこで俺ええ！？そのせいで俺っ！薪割りしてるんだからね！？」

隼人「意味がわからねえ・・・ダリル説明してくれ」

ダリル「ああ、こいつ、この宿に来たはいいが俺の部屋がわからなかったらしくてな、宿の中をさ迷ってたらしいんだが、こいつ間違っって女の部屋に入りやがったらしいんだよ」

故意じゃねえの？

隼人「で？」

ダリル「ああ、それでその入った部屋が着替え中の魔法課のセリム先生の部屋だったんだよ」

隼人「ん？セリム先生はこっちで住んでんのか？」

ダリル「仮合格者の管理人らしくてな一時的にこっちで住んでるんだと、んで覗きの罰としての薪割りだな」

隼人「それがなんで、俺のせいなんだ？」

ダリル「知らん」

小棕「だれのせいでこの宿に来たか考えてみるお！だれが一番興奮したか考えてみるお！ハアハア」

小椋が鼻血を出しながら講義してくる・・・

隼人「完全にお前の自業自得じゃねえか、それにしても薪割りだけで済んだのか、結構器のでかい先生だな」

ダリル「いや、こいつ、セリム先生に興奮して襲い掛かったらしくてな、魔法でスタボロにされたが超回復のギフトでかつてに治癒されただけだ」

隼人「襲い掛かったのかよ・・・」

小椋「あはん♪」

ダリル「もういいから、薪割りやがれ今日中におわらねえぞ」

小椋「ムリだつてえええ！この量おかしいもの！」

小椋が指差したのは大盛りの丸太だ

隼人「先生の怒りがわかるな、殺しにかかってる、がんばれ」

ダリル「ああ、まあ訓練だとも思つてがんばれ」

小椋「手伝ってくれないのおお！？ダリルなんて筋力Sだったよね！？こんな丸太なんて楽勝なんじゃない！？」

ダリル「S+だ、それを言うならハヤトも武器の重量を感じないギフトってのがなかったか？」

隼人「ああ、そういえばあつたな、なんでこいつの手伝いなん

てしなきゃなんねえんだ、と言いたいとこだがギフトは試してみたいな」

小椋「隼人様あ！一生ついていきやす！」

隼人「一生ついてこられてたまるかつ！斧かせっ」

小椋「へいっ！がんばってくださいえ！」

小椋は薪割り用の斧を手渡してきた・・・軽っ！

俺「本当に重量感ないんだな、スゲー振りませる」

俺は片手で軽く振り回してみる

ダリル「細身の隼人が片手で軽々振りましていると妙な光景だな」

小椋「すげー」

隼人「んじゃ薪割ってみるわ」

小椋「準備おーけー」

隼人「いくぞ」

俺は斧を思いっきり頭上に振りかぶって丸太にたたき付けた

ガッ！！ カランッ

小椋「うおっ割る薪の下の木までおもいきり斧が刺さってる！

すげえ！」

ダリル「重さ感じてねえから振り下ろすスピードが尋常じゃねえな、良いギフトじゃねえか」

隼人「痛え……」

ダリル「ん？」

隼人「超っ痛てえ！んだけどっ！！ふっざけんなっ武器の重さは感じなくても武器から伝わる衝撃は思いつき感じるのかよ！！」尋常じゃない速度で振り下ろしたためか衝撃が半端じゃない

ダリル「ああ、衝撃は伝わるのか、それは予想外だな」

隼人「ああ、しかも軽いせいで力も何もいれてなかったからモ口に衝撃がきたわ」

小椋「で、でも加減すれば次もいけるんじゃない？」

隼人「無理、手がもう使えね、頑張れっくれ」

指が動かねえし皮剥けたし

小椋「NOOOOOOOOO！！！！」

十話目 失恋

f r o m : 仮合格者専用宿 : 庭 : 昼

ガッ カラン

ガッ カラン

隼人「小椋のギフトは便利だな、ちょっと休むだけで体力まで回復するのかよ」

小椋は薪割りを休憩をはさみつつ数をこなしている

ダリル「さすがにレアなギフトだと効果が違うな」

隼人「あとは、状態異常無効と魔力感知か」

ダリル「良い盾だな、すぐに回復するし毒も効かねえし魔法も感知して防げるし」

隼人「まあ問題は本人が常に混乱状態って所だな」

ダリル「致命的だな・・・」

ガッ カラン

ガッ カラン

小椋「ハアハア、ちよっ二人とも手伝ってくれない？いくら体力

も回復するっていつでもこの数はムリい！」

隼人「俺は手が痛いからパス」

ダリル「お前はそうやって薪割ってるほうが安全だし俺も手伝わねえ」

小棕「ちつくそー！お前らの血は何色だあ！」

そういつて小棕はまだかなりの山になっている丸太を背に座り込んだ

小棕「あー、体が癒されるー」

ダリル「じつとしてるだけで回復ってギフトの効果つってもすげえな」

隼人「俺のギフトは異空間収納以外は微妙だしなあ」

小棕「ん？武器をあれだけ早く振り回せるなら加減すれば使えるんじゃないのん？」

隼人「命がかかってる状態で加減ができるかよ」

ダリル「いえてるな、それに加減してスピード殺すと普通に振るのとかわからねえし、疲れ難いのがメリットなくらいだな」

隼人「魔力増加のギフトも魔法を人間が使うとヤバいらしいしなあ」

ダリル「宝の持ち腐れだな、錬金術も魔力は使うがSクラスまで

魔力込めなきゃ発動できないのは稀だしな」

小椋「隼人！」

隼人「なんだよ」

小椋「俺が一生守ってやるからなっ」(キラッ)

隼人「キメエ！」

ブオンッ！ ガッ！！

余りにもキモすぎたのでとつさに新割り用の斧を小椋にぶん投げた、斧は小椋の顔のすぐ横の背にしている丸太に突き刺さった ツチ、はずれたか・・・

小椋「しぬうううう！！？？？顔！今隼人顔狙った！頬にかすった！」

隼人「ツチ、まあ落ち着け、即死じゃなきゃ回復するだろ」

小椋「舌打ち！？ていうか頭は即死コースじゃん！！」

隼人「おちつけ、俺も悪気があったわけじゃないんだ」

小椋「そ、そうなのか？」

ダリル「いや、思いつきり殺気が出たぞ、ギフト効果のせいで重量感じてねえからか斧投げた時のスピードが半端じゃなかったな」

ツチ、ダリルめ余計なことを・・・

小椋「ヤッパリイイ！？何！？最近隼人俺に殺意があると思えないんだけど！？」

隼人「小椋、そんなわけないだろう？」「最近」お前を殺したいと俺が思ってるって本気で思ってるのか？」

小椋「え、ツフ・・・すまんそうだな」

隼人「出会った頃から殺したいに決まってる」（キリッ）

小椋「デスヨネー！絶対そう言うとおもったよチクシヨオオオ！！！！」

小椋が丸太を抱きしめて泣き出し、丸太に向かってブツブツ言いだした

ダリル「オラ！小椋、もう体力は回復しただろ？さっさと割れ今日中に終わらせろ」

小椋「何この二人！鬼だよ！悪魔だよ！もう俺っ丸太と結婚するから！」

小椋が丸太を抱きしめながら泣き叫ぶ

隼人「お前、丸太と結婚って・・・丸太が可愛そうだろうが！無抵抗な奴と結婚とは最低な奴だ！」

小椋「丸太でもだめええ！！！！？っう！丸太さん！俺幸せにす

るから！毎日樹液塗りたいくるからあ！」

ダリル「さすがに哀れになってくるな・・・」

隼人「ああ、可哀想な奴だ、もういいから割れ」

小椋「俺と丸太さんの仲を裂くことなんてできないんだからね
！？」

ダリル「もういい、かせっ！」

小椋「あっ！」

ダリルが小椋の持つてる丸太を引ったくりそして

ガッ！ カランッ

斧で叩き割った

小椋「まるたんーーーー！！！！！！文字通り裂かれたあああ！」

まるたん・・・？

十一話 魔力

f r o m : 仮合格者専用宿 : 庭 : 夕方

ガッ カラン

ガッ カラン

小椋「ラストオー！」

ガッ！ カラン

小椋「おわった・・・おわったよぉー！ふたりともぉー！」

隼人「おお、おつかれさん今日中に本当におわらせたな、えらいぞ」

俺は小椋が割ってる間暇だったので丈夫そうな手ごろな木を選んでダリルにナイフを借りて彫刻して遊んでいた

小椋「本当に最後まで手伝ってくれないとはおもわなかったよ、あれ？ダリルは？」

隼人「もうすぐ終わるだろうからって料理運んで部屋で待ってるってよ」

ちなみに学園側の飯分はこっちで今日だけ作ってもらえるように頼んだ

小棕「ダリル・・・ホレちゃう!」

隼人「割った薪運ぶのは明日でいいだろ？」

小棕「そつか・・・運ぶのもあるんだ・・・つつうつつ・・・」

」

隼人「手伝わねえからな（キラッ）」

小棕「うう・・・最近隼人冷たい・・・」

隼人「まあまあ、今日頑張った褒美にこれをやろう」

俺は自分で彫刻して完成したフォルさんに似せた腰から上までの木像を手渡した

小棕「マジデ!? きゃっほおお! エルフ耳だー! ってこれフォルさんじゃね?」

隼人「暇だったからなあ、男彫る気にもならねえし、ここの動物もわからねえし」

小棕「ナイフでここまで作ったの!? すごくね!?!」

隼人「ああ、ありえないくらい綺麗にスパスパ削れたんだよ、たぶんダリルに借りたナイフのおかげだろうな」

小棕「ふーん? まあもう暗くなるしダリルの部屋に行こうつか」

from: 仮合格者専用宿: ダリルの部屋

ガチャ

小椋「ダリルー！これいいだろう？隼人にもらっちゃったぜ」

小椋はノックのせずにダリルの部屋の扉を開けてハイテンションのままダリルに話かけた

ダリル「む？おい隼人、それコートにやるのか？」

隼人「ん？何かまずかったか？」

小椋「ツハ！？ダリル！このフォルたんは渡さないからね！」

小椋は取られると感じたのか警戒している

ダリル「ちげえ！ハヤトが熱心に彫ってるからてつきり本人に渡す物だと思ってたんだよ」

隼人「本人ってフォルさんにか？なんでだよ」

ダリル「なんでってお前・・・普通、男が女の木造なんて彫ってたら贈るもんだと思うだろうが」

ああ・・・惚れてると勘違いされたのか

隼人「勘違いだ、暇だから遊んでただけだよ」

ダリル「遊んでたって・・・普通にこのままでも売れるレベルだぞこれ」

ダリルがフォルさんに似た人形を指差しながら言った

隼人「それは大げさじゃないか？ダリルが貸してくれたナイフの切れ味が良かったおかげだよ」

ダリル「む？それはハヤトが魔力をナイフに流して削ってたからだろう？」

隼人「は？魔力なんて使えねえぞ俺」

ダリル「な！無意識であれだけの魔力をナイフに流してたのか！？」

隼人「魔力ってどうやって感じ取れるんだ？」

ダリル「ありえねえ・・・そうか、お前ら人族だったな、人族は目覚めさせないといけないんだったか・・・」

隼人「人間扱いされてなかったのか・・・魔力を感じるようになるには何か必要なのか？」

ダリル「人族でも生まれた時から魔力を感じる事が出来る奴もいるらしいが基本的には魔力を扱える奴に魔力を体に流しこんでもらって感じ取るしかないんだよ」

隼人「へえ、ダリルはそうやって感じ取れるようになったのか？」

ダリル「いや、基本的に魔力を感じ取れねえのは人族だけだ、人

族も魔力は流れてるんだか感覚でとらえられないみたいでな、だから他人の魔力を流し込んで「これが魔力なんだ」と感じ取る必要があるんだ」

隼人「ああ、だから小椋も魔力感知のギフトがあるのに感じ取れねえのか」

そう聞いて小椋のほうを向いてみる

小椋「ハアハア・・・フォルたん・・・ハアハア」

小椋は人形に夢中で話を聞いていない・・・こいつ人形でもこうなるのか

隼人「・・・ということは俺や小椋も魔力を流し込んでもらえば感じれるようになるのか？」

俺は見なかったことにして話を続けた

ダリル「ああ、ただ流し込んでもらう相手は先生にしてみろえ、下手なやつにやられると人間は魔力になれてねえから魔力を流し込まれすぎて激痛が走ったり、逆に弱すぎて感じ取れなかったりするからな」

隼人「え、その流しこまれるのは痛いのか？」

ダリル「俺は人族じゃねえからわからねえが、他人の魔力つつーのは自分のとは別物だからな、人それぞれに特色があるんだ、だから違う魔力を流し込まれると異物感があるしそれを押し返そうとするんだが、そのときに押し返してるのが自分の魔力だと感じ取れる

ようになるんだ」

隼人「なるほどなあ・・・ん？でもダリルが言うには俺は魔力を使つてたんだよな？」

ダリル「俺も削つてる所を見たが切れ味を増すような流しこみ方だったからてつきり魔力を意図的に使つてるもんだとおもつてたわ」

隼人「無意識でも出るのか？」

ダリル「無意識というかたぶん集中力と魔力が隼人はでかいせいで漏れ出したんだろうな、普通に人間じゃねえ魔力量だしありえないことじゃない、魔力が高ければ人族じゃなくても感情が高ぶったりすれば漏れ出すしな」

隼人「ふーん・・・てことは誰かに流しこんで貰えれば意図的に切れ味を増したりできるんだな？」

ダリル「まあな、ただ魔力消費が高いから実践じゃまず使われなけど、それなら循環させて体力と身体能力あげたほうが生存率も高えしな、錬金術師には必要な技術だが」

隼人「む、つてことは俺の魔力は体を循環している状態なのか？」

ダリル「ああ、厳密にはしてないな。循環させるには感じ取つて体に纏わさないといけないだが・・・ハヤトは感じ取つてねえからでかい魔力を気づかず漏れ出して身体能力が上がってるな・・・たぶん」

ああ・・・そうか平原で歩いてても小椋はギフトで回復があるから疲れなかったのが理解できたが俺も疲れなかったのはそのせいかな

隼人「明日にでもセリム先生に頼んでみようかな・・・魔法課ってことはできそうだし」

ダリル「そうだな、魔法課の講師ならできるだろう、朝方俺が小椋とお前にやつてもらえるように頼んでやるよ、二人とも合格してるからやつてくれるだろうさ、時間もあんまりかからねえし」

隼人「それはうれしいが、小椋・・・もか・・・？こいつが裸を見た女の人を前に暴走しないとは思えないんだが・・・」

俺は小椋を指差しながら不安気な声で言ってみた、ちなみに小椋はトリップ中

ダリル「・・・俺が押さえつける、どちらにせよ明日は割った薪をどこにやるのか聞きにいかなきゃなんねえしな、あれだけの薪、あのままにするわけにいかねえだろ」

隼人「そうだな、それじゃあそれで頼む」

そうして飯を食べた後、小椋と一緒に自分の部屋に帰っていった

十一話 魔力（後書き）

もっと状況がわかるように詳しく書いた方がいいんですけどね？他の小説書いてる方々にくらべて状況の説明が少ない気がします

というか何時から学園に通えるんだろうか・・
主人公の名称を「俺」↓「隼人」に移しました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2456x/>

脂身と異世界にいるんだけど質問ある？

2011年10月31日22時06分発行